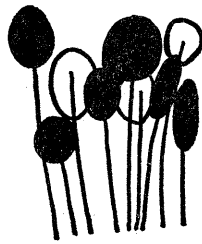


続・保育の中の小さなこと大切なこと ③

守 永 英 子



九月の半ばを過ぎたある一日、五歳児を伴って園外保育に出かけた。母親と一緒に、実りの秋を、先ず、栗拾いで楽しもうという計画である。朝は、ちょっと雨を心配したが、日中は、うす曇りで、暑くもなく、栗拾いにはよい日よりであった。

栗林など本当にあるのかしらと思われような、にぎやかな町並をしばらく歩くと、目の前に畠が広がり、畠の向うが栗林である。

栗林は、かなりな広さで、七十組の親子連れが、竹べらやかごを持って散ってしまうと、まばらという感じである。店頭で見る、黒ずんだ茶色の栗とは違い、林の中に落ちてい

いながら飛び出した栗の、つややかな茶色は美しい。母親の中にも、初経験の人が多く、一生懸命拾っているようである。

拾っている私の耳に、親子のいるいな会話聞こえてきた。その中の一つが、聞き覚えのある声で、私の耳に飛び込んできた。「そんなものを、ぼんやり見てないで、早く栗を拾いなさい！」 T男の母親である。

ふっと、私の心に、T男のおずおずした表情が浮かび、何か激しい感情にゆさぶられて、思わず声をかけた。「時間は沢山あるから、ゆっくり拾ってくださいね。おとなは、拾うことだけを考えるけれど、子どもは、そうじゃありませんも

のね」云いながら、自分の感情が、憤りにも似た感情であることに気付いて驚いた。

T男は、おとなしい、テンポのゆっくりした子どもである。おとなの表情を気にしながら、おすおすものを言う。

母親は、大きな声で、はっきりと話し、せかせかとした雰囲気である。この単に対照的と思えたものが、実は因果関係を持っていたのではないだろうか。「粟を拾う」という目的行動の合間に、ちょっと他のものに関心をそらすという寄り道を許さない母親の態度が、無意識に、生活の広い範囲を覆っているとしたら、彼は、子どもらしい、いろいろな興味を、無下に摘まれてしまっているのではないか。子どもらしい、心の寄り道を、母親の生活の効率のために否定されるならば、おとなの顔色を見、おすおすとした態度が生まれるのは当然ではないか。私は、T男のために、抗弁せずには、いられなかったようである。

このことと対照的に、私は、M男の母親を思い出した。M男が、バスで通園の途中に、工事現場があり、彼は、その様子に大変興味を持った。母親は、彼の興味を満たすために、帰りのバスを途中で降りて、しばらく、一緒に見ていた、と

いうことであった。このことを話す様子は、楽し気で、子どもと共にあることの喜び、子どもの成長を見守ることの幸せを味わう人のゆとりが感じられた。M男は、おとなに対する信頼感を、しっかりとした土台として、明るく、子どもらしく、のびのびと育っている。

日常生活の中の、小さな事柄の、小さな違いではある。しかし、子どもと共にあるおとなが、子どもらしい当然な行動を、否定するか、肯定するか、違いの持つ意味は大きい。その積み重ねは、子どもの性格を形作っていくもののように思われる。

このようなことは、母親との、改まった話し合いの中では、見つけにくいものである。それほど、無意識に、生活の中に織り込まれた態度であり、それだけに生活の中に広く影響を持っている姿勢である。このことに、母親自身、気づき、変化できるためには、どうしたらよいであろうか。

これは、母親だけの問題にとどまらない。保育者自身、自分の行動を見つめ直さなければならぬのかもしれないと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)